

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施したのか)

専攻、分野横断的な科目群として研究科共通基礎科目に高度職業人養成科目を設置した。高度職業人養成科目は、専攻や分野の違いを超えて必要な研究能力を強化し、スキルを会得するための科目群である。そこではアカデミックキャリア志望者、ノン・アカデミックキャリア志望者のいずれに対しても、大学院修了者に要求される共通の基盤的・専門応用的教育及び実践的なスキル訓練が教授された。高度職業人養成科目は、調査技能・IT能力強化部門、発信英語力強化部門、企画実践力強化部門、プレゼン技法強化部門、教育技能強化部門の5部門で構成される。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

本プログラムは、高度職業人養成科目とキャリア支援事業で構成される総合的なパッケージとして効果を発揮するものであり、この点に留意した。高度職業人養成科目とキャリア支援事業の関連、高度職業人養成科目内での各科目の関連づけを、学年の初めに実施する説明会で説明し、院生が組み合わせて履修・利用することを奨励した。また本プログラムは修士課程修了者と博士後期課程修了者双方の研究・就職上のニーズに対応する必要があったため、この点にも留意した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

高度職業人養成科目は、平成20年度、21年度の2年間で46科目、47クラスを開講した。受講者総数は、20年度163名、21年度161名であり、毎年度社会学研究科院生現員(約480名)の三分の一が受講した計算になる。修士課程院生の延べ受講者数は、修士課程定員の55%、修士課程現員の5割近くに達した。修了要件上単位取得の必要性がうすい博士後期課程院生においても、博士後期課程定員の半分近くに相当する院生が高度職業人養成科目を受講した。これは高度職業人養成科目が院生のニーズに合致していることの証左と言えよう。高度職業人養成科目は、毎学期実施した受講者アンケートの結果、いずれの科目も満足度が高かった。院生アンケートやシンポジウムでの院生の発表から、院生も本プログラムの総合的なパッケージ性を認識し、積極的、意識的に利用したことがうかがえる。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

③論文作成支援の充実

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本プログラムの開始以前から、修士論文執筆のための研究分野ごと(地球社会研究は専攻全体)の修士論文発表会、最終試験の実施による集団指導、博士論文執筆のための論文指導委員会の設置という制度を導入していた。これに加えて、本プログラムでは修士課程院生には入学直後のキャリアデザイン講習会において修士課程のプランニングをさせ、修士論文作成と就職・進学を早期に意識化させた。2回目の修士課程院生向けキャリアデザイン講習会では修士論文を提出した博士後期課程1年生の先輩を講師に招いて修士論文執筆について講演をしてもらった。博士後期課程については、博士後期課程1年生を対象に、アカデミックキャリア講習会を開催し、アカデミックキャリア支援者が博士論文執筆の構想について講義したり、博士号取得直後のジュニアフェローに博士課程の研究・生活、博士論文執筆の体験を講義してもらうなどの企画を実施した。またアカデミックキャリア支援者が行う個別相談においても博士論文執筆上の相談に応じた。高度職業人養成科目のうち、企画実践力強化部門は、院生のフィールドワークや海外学会発表等の研究企画に対して、競争的資金の形式で、研究資金を助成するものであり、院生はこれを利用して博士論文や修士論文のための研究に必要な調査や学会発表を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

従来からのゼミ制度を通じた指導教員による指導、修士論文発表会や論文指導委員会によるゼミを超えた指導に加えて、本プログラムがキャリアデザイン講習会やキャリア支援者の個別相談を通じての論文作成支援を行ったことで、院生には多面的な指導や相談が行えるようになった。これら相互の連携を深めるために、教員に対するFDを実施して、キャリア支援事業による講習会や個別相談、高度職業人養成科目の企画実践力強化部門による研究助成についての教員間での理解を広める努力をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成20年度第2回のノン・アカデミックキャリア講習会では、修士論文執筆の

プランニングと就職活動のプランニングと題して開催し、参加者数 22 名、満足度 100%であった。平成 21 年度の修士課程新入生を対象とする講習会では、修士論文執筆のプランニング、就職活動のプランニングを実施した。参加者は 65 名、満足度は 90%以上であった。これは、院生が研究を計画的に構想することの意識化を図ったものである。企画実践力強化部門の若手研究者研究活動助成については、採択者に対するアンケートの結果から、助成でフィールドワーク等の調査ができ、修士論文や博士論文の研究が進展したことを評価する声が聞かれた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施したのか)

高度職業人養成科目の企画実践力強化部門は、院生が主体的に企画実践するフィールドワーク、海外学会発表等の研究企画に対して、渡航費、宿泊費等の経費を一部助成するものである。年に1、2回院生から研究企画を募集し、本プログラムの担当教員から選んで構成された審査委員会で研究企画の申請書を審査し、優れた企画に研究者助成を行うという競争的資金の形態で実施した。研究企画の実施後は報告書を提出させ、それに基づいて成績評価を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

研究費を自動的に支給するのではなく、審査委員会の審査を経て決定するという競争的資金の形態をとることで、院生が研究資金獲得のために、研究の計画や実施を自覚的に行い、改善をはかる動機を与えるようにした。審査の過程では単に競争させて選別するというだけでなく、採択者、不採択者の申請書に審査委員会がコメントを付して返却した。このような教育的措置を執ることで、院生が研究計画書や外部資金獲得のための申請書を作成するトレーニングになるよう意識して実施した。これは報告書についても同様である。企画実践力強化部門を通じての研究資金の助成と並行して、アカデミックキャリア支援担当の講師が、アカデミックキャリア講習会の一環として外部資金や奨学金、留学資金を獲得するための申請書の書き方の講座を開設した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

企画実践力強化部門では、平成19年度から21年度の3年度で修士課程院生33名、博士後期課程院生43名から合計78件の申請があり、65件が採択された。これにより、フィールドワーク58件、海外学会発表4件等の研究企画が助成を受けて実施された。院生に対するアンケートの結果では、「海外調査に対する助成金の支給は非常にありがたいものでした。研究計画上大きな助けになった」という回答に見られるように、助成で調査等が実施でき、修士論文や博士論文の研究が進展したことを評価する声が聞かれた。また「経済的に助かっただけでなく、緊張感と安心感をもって調査を行うことができた」という回答にあるように、助成が院生の研究への動機を高めたり、精神的な支えになったことがうかがえる。さら

に「今回の選考過程や経験が他の研究資金を申請する際にも非常に参考になる」という回答が示すように、研究計画書の書き方や研究資金獲得の訓練になったと考えられる。